

伺つておつた。師父は君の將來について非常に期待しておられた事は申す迄もない、君が世田谷高校を立派に卒業し、更に駒大に入學し、ぐんぐん勉強して一昨年三月には又好成績で卒業され、その卒業論文の如きは、當時同級生間に群をぬいて書かれてあつたなど、師父は非常に喜んでおられた。従つてその將來に對する囑望も非常に大きいものであつた事は申す迄もない。然るに昨年九月六日北海道に渡り、當時友人室蘭の西乗寺住職西永成師の許に至り、約三ヶ月滞在の予程であつたのを都合上歸途を早め、九月廿六日夕方に函館からあの魔の渡船洞爺丸に乗り、歸國せんとする途中、海上にてあの災厄に遭い、他の多くの船客と共に不幸不歸の人となられた。因縁といへば因縁だが、餘りにも悲しい因縁であつた、いかにも氣の毒でならない。御両親の悲歎はいかばかりか。これを思うと自分としても胸の痛むを禁ずる事ができない。君は性質温順で、而も青年らしくいきいきしておつた、殊に人情に厚かつた、平素黙々として多く語らないが何か人に頼まれてこれを承諾した以上はその約束をはたさなければやまないといつた所があつた。だから交友の間にも自然尊敬もされ又親まれておつたという。殊に研學については非常に熱心で常に計画を立て、勉強しておられ、大學卒業論文の如きはよくその一端が伺われる。又君は常に「將來は僧侶として本分を忘れずに佛教を新しい時代に活かさねばならぬ」という念願をもつておられた。近頃の青年僧侶としては立派な心がけであつた。新しい方面に對して關心をもつ事は近代青年僧侶としての當然の心がけではあるが、それがやゝもすると自分の本分を忘れたり、離れたりするところが青年僧侶の通弊である。この點からみて君の念願は堅實にして眞面目なものがあつた。これが尊いのである。

然るに天はこの有望な青年の念願を果さしめずその身體までも奪つてしまつた、いかにも残念であり惜しい事である。況んや社會事情の變遷につれて昨今の佛教情勢はいよゝゝ衰退の一途を辿りつゝある、心あるものは何とかしてこれを挽回しよう苦心もし努力もしておるが、要するに人である、人を得なくてはいかんともいたしかたがない。正に將來を負擔する青年僧侶の堅實なる思想と熱意ある努力に待つよりしようがない。この點よりみて君の如き有爲の人に期待する事は當然であつた。不慮の災難とはいふものゝ今日忽然として有爲の君を失つた事は實に惜しい、誠に教界の一大恨事といはねばならぬ、父母の悲歎も御察しするが、私たちは教界の爲に特に君のこの逝去を悼んでやまないのである。

哀悼譜

曹洞宗宗務廳教育部長 遠藤靈羊

世界海難史上第二の大慘事であると云はれる洞爺丸事件は、科学を輕視する日本人のメンタリテイを最も端的に現はした代表的な悲劇である。そして一瞬にして有爲な人々を暗黒の海底に呑んだ此の未曾有の慘劇は永久に吾々日本人の腦裡から消え去る事のない焼印であろう。桑山さんの様な前途ある輝ける学究の徒が不幸にしてその犠牲者の一人であつた事は誠に残念である、

桑山さんには生前一面識もないが、桑山さんを圍む親しい人達の話では稀に見る革新的な情熱に燃ゆる新進の学徒であり、その指導に當つた教授の話では今後の新しい學究に對して十分期待して居たと云ふ事を聞いて、目頭が熱くなる思いだつた。然も宗學者の少い今日特に禪宗史を専攻されて性魂を盡されて居られた由だが今回の不慮の慘事に尊い生命を奪はれたことは、何と云つても哀悼にた

えない。今度桑山さんと懐しい人達によつてその追悼集が上梓されると云う事を聞いて自分の事の様にはのぼのとうれしい思ひだ。此の追悼集が生前したしかつた人達の友情と御両親の愛情に乗つて、世に問はるゝ事は、せめても日本人の科學輕視への美しい抗議であり、警鐘であろう。そして桑山さんの靈の上に絢爛と花咲くであろう。

私は改めて桑山さんの永生の爲めに祈らう。

可睡齋の桑山君

前可睡齋住職 永江金榮

偽り多き世の中に死ぬるばかりは眞なりけり。とは申せ何たる悲壯な因縁であるか、前途有爲の青年僧をなくした事は宗門ばかりでない社會の痛恨事である。君は宗門最高の學府に學び卓拔な卒業論文を發表し將來を屬望されて卒業し、永平寺僧堂に安居、高祖道を体し、更に萬松山可睡齋専門僧堂に錫を留め萬年汁を萬喫しつゝ秋葉三尺坊眞前に頗る眞面目に奉仕された。君は在學中に可睡齋で立職されたので即ち拙衲の首座和尚でもあるので、従つて拙衲は親しく君の行履に接し君の平常底を知つた。

君は理論家であると同時に黙々と行ずる實行家であり責任感も強かつた、また親切でもあつた。三尺坊御眞殿の役を殿司と言ふが從來道心のある僧にこの配役をする。君は侍局詰をしながら暫らく眞劍にこの殿司をやつた。拙衲が昭和廿八年十二月成道會に發病して二ヶ月以上も方丈で臥床してゐる時にも君はよく看護して呉れた、寒い朝も厭はず袋井病院へ隔日に薬を取りに行つて呉れた。其れこれ感激してゐる、忘れぬ君だ。君は既成宗教の裏面に疑惑を抱いてゐた、鋭い感覺も持つてゐた。今思ふと最初、君は僧團の生活が出来るか知らんと不安に思つた程であつたが可睡齋送行の頃は性格

が一変した様に温良清淳の君であつた。昭和廿九年二月拙衲が可睡齋を引退すると同時に君も送行された。これから本師を補佐して秋葉講を盛大にして萬藏寺山門の隆昌を企画されて居られた其の時、不幸洞爺丸の遭難、君また千數百人と共に遂に失命、惜しい事だ、御本師は君を後継者として期待して居られた程に其のお力落しは如何計かと痛哭するものである。然し君の弟君は君の不慮の死に直面してお通夜の晩、断然剃髮得度、目下可睡齋に安居し君の跡を眞面目に履行してゐる。有難い事だ。道心堅固に弟君も兄の冥福を祈ると同時に御本師様に御孝養を盡される事を切望し、かつ期待して居ります。

現場にて

静岡縣森町大洞院主 浅野哲禪

時は本年十月六日午後二時、有川棧橋の濱に洞爺丸の遭難者の慰靈弔問に往つて帰る時である、乗り物をつ間に遺品として上つたらしい風呂敷を擴げて干してある物の中に百八つの黒い念珠が北海道名産とよい対照をしてゐるのが眼に入つた。変な物があるナ一と熟視してゐると突然淺野さんちやありませんかと聲を掛けられた。

其の異郷の土地恰かも其の大事件の現場でと、びつくりしたが、先き様は白のマスクを掛けて居られる関係もあつて直ぐに何處の誰様か分らなかつた。モジモジしてゐると私は桑山ですと名乗つて下さつて始めて分つた。一体どうしてと訊くと息子をやられて終つたとの一言のみ、双方暫時暗黙、一所に居られた次男さんを紹介されたがその寺の後継者としてうまく行く様又早くその御遺骸と今一つの遺品のあがる事を念じて次ぎ／＼とスケジュールに従つて往かねばならぬ私であつた。車中から十一月二十日恩師秋野裕禪師